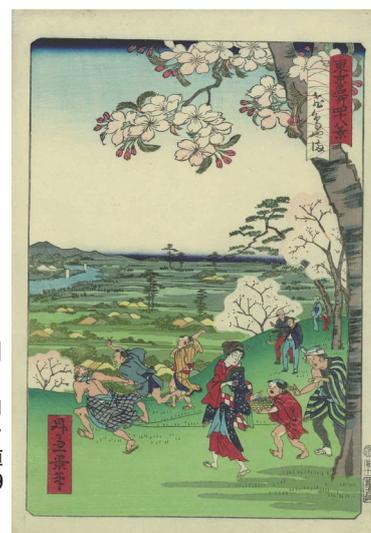
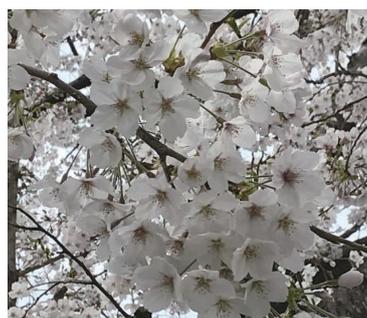
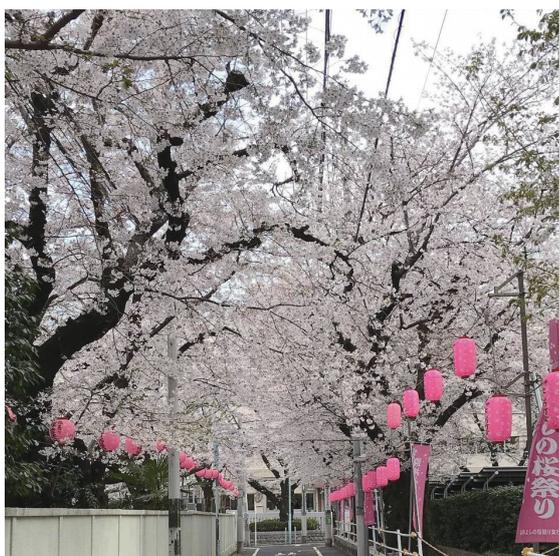


# かたりべ135

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより



写真右 「東京名所四十八景 飛鳥やま」  
(当館蔵)

写真左 駒込六丁目西福寺前のソメイヨシノ並木 西福寺はソメイヨシノ発祥に深くかかわる染井の植木屋たちの菩提寺である (2019年3月撮影)

写真上 ソメイヨシノの花弁

## 江戸の花見 (ソメイヨシノがなかったころの観桜とは)

八代將軍徳川吉宗が行った植樹政策により桜の名所となった飛鳥山(公園)。上の錦絵は、明治四(一八七二)年板行の昇斎一景による「東京名所四十八景 飛鳥やま」です。右側に描かれる桜には、花弁と葉両方が描かれているところから、この桜の品種はヤマザクラあるいはオオシマザクラ(の類)と思われる。現在日本全国に分布する桜の八割以上を占めるとされるソメイヨシノは、葉が出る前に開花し、花が散ってから葉が出るという性質を持ちますが、ヤマザクラやオオシマザクラは葉が出た後、葉がある状態で開花するため、このような推測ができるのです。

ソメイヨシノ(染井吉野)は、エドヒガンとオオシマザクラが交雑した品種として一八世紀後半頃に誕生したとされています。当初はヨシノザクラあるいはヨシノと呼ばれていましたが、植物学者の藤野寄命が明治三三年に桜に関する報告書の中で「そめいよしの」を初めて用い、翌年植物学者の松村任三により学名が与えられ、以降ソメイヨシノという和名が浸透していきま

す。樹形や花の美しさ、また管理の容易さ、さらに交通網の整備と種苗業界における通信販売の普及もあり、二〇世紀以降急速に全国へ広まります。よって先の錦絵が板行される明治年間初めには、ソメイヨシノは飛鳥山に植樹されていなかった可能性が高いのです。

さて、江戸時代の文人で狂歌師・随筆家としても知られる大田南畝(一七四九—一八三三)は、寛政四(一七九二)年閏二月九日(現在の暦で三月二日)から上野・日暮里ほか、江戸の花名所へ八回も出かけています。「彼岸桜」、「糸桜」、「山桜」、「牡丹桜」、「熊谷桜」といった桜花を愛でたように、「閏二月九日に初めて花を見、二十三日まで八度花を尋ねし也」と「花見のき(日記)」(『大田南畝全集 第八巻』所収)を結んでいます。

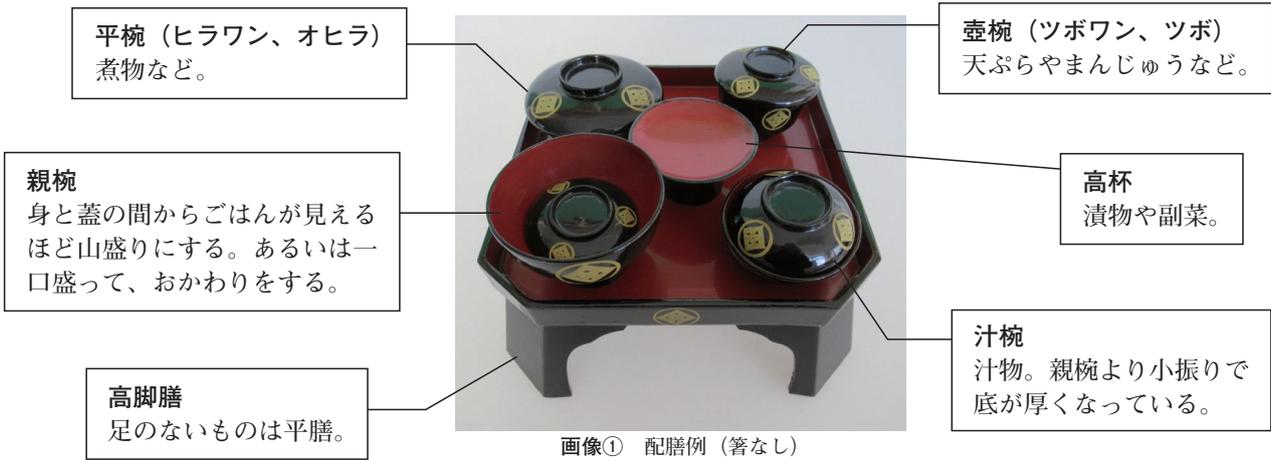
ソメイヨシノの開花から花が散るまでおおよそ二週間、現在の東京地方の花見は、ソメイヨシノに特化したいわば短期集中型です。それに対して早咲きの桜から遅咲きの桜まで、開花時期の異なる多品種の桜を楽しめた江戸の花見は、長期分散型とすることができます。果たして花見のスタイルのお好みは皆さんどちらでしょうか？

(郷土 秋山伸一)

# ハレの日を彩る 膳碗たち

皆さんは普段の食事でのどのような食器を使っていますか？陶製のごはん茶碗に皿、鉢、木製の汁碗、湯呑茶碗など、料理や素材によって食器を使い分けている方もいらっしゃると思います。では、日頃の食事とは一味違う、特別な日の食卓ではどうでしょうか。民俗学では正月や婚礼等の特別な日を「ハレ」と言います。ハレの日は普段と異なる特別な食事が用意され、集まった家族や親類、近隣の人々に饗あやうされていました。その際に使われたのが、漆器の膳碗です。

画像①の館蔵資料は、高脚膳の上に、丸に四つ目菱の紋が描かれた様々な碗が並んでいます。この膳一式、実は雛人形の付属品、つまり雛道具として揃えられたもので、婚礼の場に用意された膳のミニチュアになります。親碗、汁碗、平碗、壺碗、高杯など、配膳は家や地域によって異なり、ごはんではなくうどんやそばが出ることもあります。加えて陶磁製の皿や猪口ちぐちに魚や酢の物が盛られたり、二の膳、三の膳が並ぶことも。一人前としては随分と量が多いですが、料理は手土産として包んで持ち帰ることもできます。



画像① 配膳例 (著なし)

た。それとは別に、鯛の塩焼きや蒲鉾かまぼこ煮しめなどを詰め合わせた折詰を引出物として持って帰ってもらいました。

昔の冠婚葬祭は、式場ではなく各家で執り行うことが多く、前述の通りたくさんの方がお披露目の宴に集まりました。それだけの料理、それだけの膳碗を一つの家で揃えることは相当の手間です。料理については、料理人を家の台所へ招き、近隣の女性たちが調理や配膳を手伝うということもあつたようです。

豊島区内ではどうだったのでしょうか。『豊島区民俗資料調査報告書』(昭和五二年刊)には、婚礼の際には近隣の女性たちが集まり、調理や配膳を行っていた様子が聞き取りされています。

一方の膳碗ですが、大きい家の場合、一〇人前(画像②)または二〇人前を一組とした膳碗を数組揃えて持っていることもあり、これがステータスシンボルになっていた時代もありました。ですが一般的に人生に数度しかない冠婚葬祭のために何組もの高価な漆器類を揃えておくことはなく、自前の物と、不足分を近隣の人たちが持ち寄って数を揃えていたようです。そのようななかで出来たのが、「講中こうちゆう碗」という仕組みです。講に所属する人々がお金を出し合って共有の膳碗



画像② 平膳 10 枚を入れていた木箱。「会席膳 拾人前」の墨書。

を買い揃え、必要になったときはそれらを利用するというものでした。膳碗以外にも、皿や猪口、角樽、盃、銚子なども揃え、村落で共有保管することもあつたといえます。

やがて婚礼や葬式は、家ではなく家外の式場へと場が移り、昭和三〇年代頃になると家で一揃の膳碗が使われる機会も徐々に減っていききました。今では、おいしい初めの儀等で小振りな膳碗一揃を見かけることがあります。

普段の食事ではどうでしょうか。木製の漆器に代わり、洗いやすさや保温性に優れた陶磁器が使われる場面が多くなってきました。しかし、すべての食器が陶磁器に取って代わった訳ではありません。現在でも、汁碗は熱を伝え難い木製のものを使用することが多く、木製碗に似せた樹脂製の碗も販売されています。次に味噌汁や吸物をいただく際は、器に目を向けてみるのもいいかもしれません。

(郷土 岩崎 茜)

## 連載「絵はがきは語る」(13) 落合長崎郵便局と落合電話局

日本の近代化に大きな役割を果たした郵便と電気通信は、私たちの生活に欠かせない重要な情報伝達手段です。しかし、豊島区の郵便と電気通信の歴史については、資料が少なく、よくわかっていません。今回は、当館に寄贈された絵はがきを手がかりに、その歴史の一端を探ってみたいと思います。

豊島区で最初の郵便局は、明治三十七(一九〇四)年巣鴨町に開設された巣鴨郵便局です。大正七(一九一八)年に二等郵便局に昇格し、昭和七年(一九三二)年の区制施行に伴い、豊島郵便局と改称しました。一方、集配を行わない三等郵便局として、大正四年に池袋郵便局が、同五年に巣鴨庚申塚郵便局が設置され、以降、都市化の進展とともに増加し、昭和一二年には二〇局を数えました(『豊島区大総覧』一九三七年)。

当時、豊島郵便局は駒込・巣鴨・池袋地域を管轄しており、池袋の一部と長崎地域、落合町(現新宿区)を管轄していたのが落合長崎郵便局でした。大正四年豊多摩郡落合村(現新宿区)に開設された下落合郵便局を前身とし、翌年に落合

郵便局と改称、同一三年に二等郵便局となり、昭和五年には局舎拡張のため、落合町と長崎町の有志が連合組合を組織し、建築資金を出資して(工事費四六五〇〇円)、目白通り裏の町界(現新宿区下落合四一・二六)に新築移転し、落合長崎郵便局と改称しました(『落合町誌』一九三二年、『豊島区史』一九四一年)。

下の写真は、落合長崎郵便局が昭和一一年二月の自動式電話の開始を記念して制作した絵はがきです。郵便局と電話開始の関係を不思議に思う方がいるかもしれません。実は、明治中期からその後、曲折を経て昭和二四年五月末まで、郵便事業と電気通信事業は逓信省が管轄していたため、郵便局は郵便・貯金・保険業務のほか、電信・電話業務も行なっていたのです。『落合町誌』によれば、落合長崎郵便局は、大正一一年に電信業務を開始し、昭和六年三月に電話業務を開始したとあります。

しかし、写真①の建物は、地図や空中写真などから、落合長崎郵便局とは別の建物であると推定されました。一方、この郵便局から約七〇〇m西側に落合電話

局があり(現豊島区南長崎二・三二)、写真①の外観によく似ていました。そこで東日本電信電話株式会社に落合電話局について照会したところ、「落合分局」時代の沿革が明らかとなりました。

落合分局は、落合長崎郵便局の直轄局として、昭和五年五月に手動式電話局として開局しました。手動式とは電話交換手を介して電話をつなぐ方法です。その後、新たに鉄筋コンクリート二階建ての局舎を建設し、昭和八年五月に竣工、昭和一一年二月に加入者数八〇〇加入の自動式電話局として開局しました。自動式とは交換手を介さない自動交換式を採用する電話局のことです。以上のことから、写真①は落合分局の建物となります。

写真②の左は「自動機械室」で、右には「市外交換室」で働く袴姿の電話交換手が写っています。この当時、市外電話はまだ手動式だったことがわかります。

その後、落合分局は昭和一九年四月の東京豊島電話局発足時に、同電話局の落合分局に編入されます。戦後は、二回の増築により地上三階建てとなり、落合電話局として親しまれました(現存せず)。

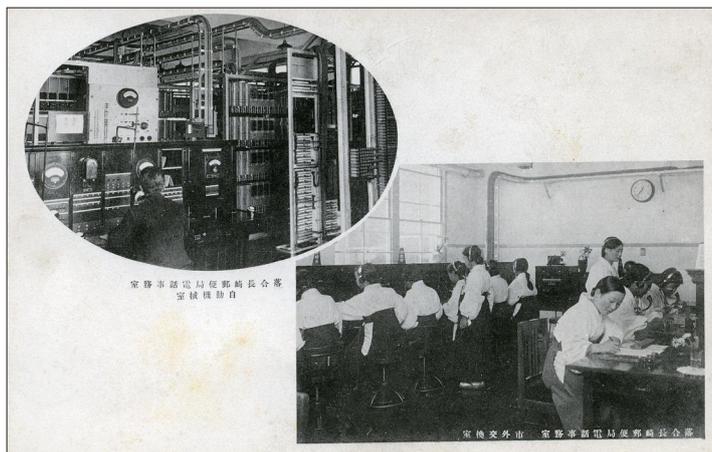
一方、落合長崎郵便局は昭和三五年に新宿郵便局落合長崎分室となり、新宿北郵便局落合長崎分室を経て、現在は新宿下落合四郵便局が設置されています。

※調査協力…東日本電信電話株式会社

(郷土 横山恵美)



写真① 電話事務室外観



写真② 左が自動機械室、右が市外交換室

# 作品を見る読む 18 吉井忠

戦前、豊島区や落合周辺に住んでいた意気ある芸術家たち、とりわけ画家にはフランスへの留学を望むものが多くありました。例えば豊島区所蔵の作家には里見勝蔵（二八九五―一九八二）や藤田嗣治（二八八六―一九六八）の名が挙げられます。フランスに渡った画家たちはそれぞれに技術を磨きながら、パリの街並みや郊外の自然を描いた作品を数多く残していることから、彼らにとってフランスの風景がいかに魅力的な題材であったかが窺われます。今回紹介する吉井忠（よしいただ）（一九〇九―一九九九、福島県生まれ）もフランスの風景を描いた画家のひとりです。吉井は一九三六年にシベリア鉄道経由でフランス・パリに渡り、約十ヶ月滞在、ほぼ独学で画業の鍛錬をしています。ルーブル美術館やギャラリーを歩き来し、オールドマスターから最新の作家の活動までを実見する

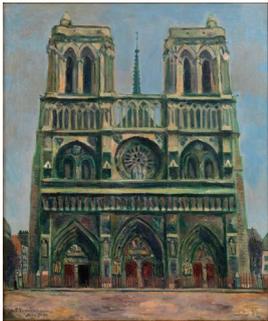


図1

日々の中、《ノートルダム》（図1）という作品でノートルダム・ド・パリ（Notre-Dame de Paris）の司教座聖堂の西側正面を描きました。これは作家の帰国後一九三七年に開かれた「吉井忠滞欧作品展」にて二三点の作品と共に発表した作品で、友人の寺田政明（一九二二―一九八九）による展評では筆頭の評価を得ています。「ノートルダム」（サン・ジェルマン寺院）には建物の描寫力などに於て、デッサンの把握から色彩の構成に新らしい近代的なものがあき空間の表現も美しい。」※（原文ママ）

寺田が指摘するように、吉井はノートルダム寺院のプロポーションを重視し作品を仕上げています。二六三年に着工されたノートルダム司教座聖堂は、垂直線と水平線の均衡を重視するフランス・ゴシック様式を体現し、中でも西正面の入り口ファサードはその特徴を顕著に有しています。柱とアーチで構成された壁面の五つの階層は、二つの塔の間から覗く尖塔が中心軸として中央の円形のバラ窓を貫きながら左右対称、また階層毎の開口部も全て対称です。構造を示す柱の直線の上を走る、階層を成す水平帯の区切りは、彫

刻の装飾により強調されています。作品のノートルダムはカンヴァスの中央に配されていますが、この配置によって建築物を取り囲む手前の地面や遠景の空は等間隔の余白として機能し、建築物における調和をより際立たせて見せる効果を生んでいます。アーチや壁面彫刻を赤と緑の色調の使い分けで陰影に富んだ表情に仕上げたファサードの筆致にも、補色の効果を巧みに計算した様子が見て取れます。建物の表面をなでる影の方向から、日の出から南中の間を描いたと推測されますが、吉井もこの建築物の形状に純粋な興味を持ち、ファサードの影がより明らかに発生する時刻を狙ったのではないのでしょうか。

二〇一九年四月に起こった大規模火災は未だ生々しい記憶です。フランス政府は早急に対応し、数年以内の修復を宣言しています（専門家は数十年かかると見込んでいますが）。昨年は世界各地で世界遺産など文化財への甚大な被害が相次ぎました。それらの報せからは文化財への災害対策と恒久的保護の難しさをまざまざと実感させられました。しかしどのような状況にあつたとしても現場では最善を尽くすのみです。

（美術 堀口麗）

## 編集後記

いよいよ今年度最終号となりました。「かたりべ」一三五号をお送りいたします。二〇一九年は元号が平成から令和へと変わった歴史の節目といえる年で、一年を通して慌ただしい年であったと感じます。二〇二〇年度も、夏には東京オリンピックが控えています。『かたりべ』は例年通り刊行する予定です。ご愛読よろしくお願いたします。

さて、一三五号が刊行する三月は、産卵のために深い沖合の海から浅い沿岸部に移動するマダイがよく獲れる月の一つです。地域によって差はありますが、暖かい海ほど産卵時期が早いといわれています。高級魚の代名詞ともいえるマダイは、やや深い岩礁や砂礫底に生息する肉食魚です。赤い鮮やかな体色や「めでたい」という語呂合わせからも、正月や結婚式などの祝い事、二頁で紹介のあつた所謂「ハレ」の日に出される祝儀魚として日本人に親しまれています。マダイを食す歴史は古く、縄文時代まで遡ることができ、豊島区池袋本町に位置する池袋東貝塚からは、実際にマダイの頭骨や顎骨などが発見されています。マダイを食べる機会があれば、縄文時代にどのように調理して食していたか、想像をしてみると面白いかもしれません。

（編集 水吉雄人）

かたりべ  
No.135



2020年3月13日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4  
としま産業振興プラザ7階

電話 03-3980-2351

URL

<http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html>

※『みづゑ』第三九四号 春鳥會 昭和二十二年二月三日発行